





尾崎如葉印ナリ

蕉翁發句說叢大全卷第二



春部下

八九間、空よ雨少る 柳、のれ

葛飭

素丸著述

同

南臺檢校

壹

**袋** 云此句ハ柳の系此風よ麗きくあつたりさ由八九間と空に

あは降よ依極えり又也之 **林** 云ぬる雨とくもや方のくく滑て

晴く日の陰りハ出類柳此系乃静さハ八九間も空に雨の降  
心迷くも何となく景曲のそく水は依之或僧の素りて此句此の























さぬかりぬ屋

のめ

山はくさうもぬく物まづ二

**解**

云齊宮の忌詞小佛をさうことし経を漆糸とし寺を瓦葺

ものいふ事なり世間よゆる瓦を月二の蔵王堂を扱ふ

**袋林**

此句を出る

**説**

蔵王堂のりり忌詞よありまづも。齊宮の忌  
詞ハ延喜式小るてそれあり寺を瓦葺ものといふも。少の  
るまづ。まづ説をぬく。○延喜式五神祇齋宮式凡忌詞

内七言佛稱中子經稱漆紙塔稱阿良々岐寺稱瓦葺云

るに瓦ふくものいふ家納ち長嘯子の文才也。○奉白集

山家の記是ハ隠居  
の記常よ住所を瓦かくりの二川函丈二間をハ

去つてと。此まのち。文章のち。源氏物

治やとあり竹をいふと。物せんといふあり河内也。出

徒長嘯子の文章す。わ。家。海。色。け。詞。を。こ。の。ま。ず。わ

る。い。の。め。ぬ。け。あり。二の堂は。乃。必。あ。る。中。より。出

く。と。え。る。と。瓦。か。く。もの。先。二。川。の。中。に。い。は。し。二。つ。と。ち

西。より。い。ふ。一。芳。野。山。へ。い。ふ。と。も。や。毒。の。ま。ず。わ

ら。る。と。二。の。堂。乃。又。あ。る。目。前。也。一。此。を。い。は。し。二。つ。と。ち







良編ハ引用ハ難シ。古き村叟の云。行基の世派ト馬所山  
し。このこと。さういふを。勅し。ずと云ふ。

悼呂九

當歸より何れかの塚のすゝれ草

**袋** 云是追悼の句。故実を引て表ひ此句しむ。地國より  
く遊ひて故郷へ遠志を送る。是の遠く思ふこと。其處より  
當歸を送り。是の當歸。一。その心。是をいふ。一。當歸を送  
る。より。墳地。董友の。一。入表。一。是の遠く。より。事  
もの。又。了。り。**解** 云呂九ハ出羽國羽黒の藤の人也翁の驥尾子也

て一。度武江の深川。一。飯麻。一。其。洛乃。桃。花。坊。小。手。を。越。し。衣。更。着  
此。初。旅。中。め。し。黄。泉。の。客。と。句。せ。世。向。ふ。云。當。歸。ハ。唐。の。孟。遲。の。詩  
に。藤。蕪。亦。是。王。孫。草。莫。送。春。香。入。客。衣。藤。蕪。一。名。當。歸。此。二  
字。當。歸。と。讀。く。夫。の。旅。の。め。を。さ。し。小。閨。情。の。情。し。愛。れ。當。歸。の。二。字  
そ。以。插。す。め。め。し。又。楚。辭。九。歌。曰。悲。莫。悲。兮。生。別。離。樂。莫。樂。兮  
新。相。知。い。ん。を。持。し。當。歸。の。ふ。き。後。進。し。ま。い。ち。り。か。ら。し。び。死。別。ち  
又。う。り。し。表。し。と。云。句。意。句。し。董。州。ハ。塚。ト。住。し。め。を。持。せ。る。一

**林** 此句は出づり

**説** 當歸遠志の出。不。心。れ。亦。用。か。し。在。當。歸。り。是。よ。り。の  
か。し。去。り。し。此。句。意。同。呂。九。を。し。し。句。と。し。事。を。知。り。可。惜。







用家ハ初平此風歎。俳諧ハ浅うりて却て。必常也。○ 白氏長慶集云。古墓何代人。不知姓與名。化為路傍土。年々春艸生。是らの侍より業。神傳也。○ 句意ハ出羽の岩司呂丸。旅中ニあつきて。終一塚のり。に。住む人。と。名。近き所。おも。何。う。増て。遠き。境。ひ。乃。人。あ。れ。當。歸。の。名。也。今。の。者。と。董。の。こ。中。ひ。て。墓。の。り。に。す。む。人。と。あ。り。こ。二。原。に。古。の。を。修。り。て。所。修。く。は。う。ひ。こ。あ。り。名。人。の。多。故。也。故。の。人。く。ち。さ。や。遠。志。の。な。げ。い。ひ。や。何。と。も。也。是。と。余。情。也。

川春を何人の人と惜しげ侍

ウリイ

とらや

**袋** 云此句表じき春を近江の人と惜しむ情をうらやみに云ひ  
 分りり心と願く湖水眺むと何心と或前跡をゆくね三夜  
 此夷江忍く前りての句に去後情は色に東都よありえ夷江を色  
 むの人の情をうらやみに云ひ近江よまて近江の人と惜しむ情を  
 惜しむの作也句面白く切字又く大振ハ大廻一かゝる格乃  
 やらぬ句も句中小慥なる切而何れ教奇人のことなりけりと略と  
**林** 云費之奇く又もまじめきとありとあのもまきぬ我乃ありと  
 ば惜きまうわが侍姿りやまてしりよあも乃句はくは妙也可  
 考りしや **解** 云翁石山寺の奥幻住菴に在り此とこの門人  
 等と春を惜めり湖水の眺むしは句を惜しりりと出づ侍集阿



已一句の情々るといふ事いふ立派云

説袋 注一向とる所なり。兒童のもののいふが如し。林引言以ても

奇くは古来より。三月に此詩歌を引合ふ人といふ所の詩言  
とては春を惜すぬやいある。翁の句に古詩といふむら  
い。まよも海とてことし。解 幻住菴少の吟とて海にまよ

廉索也。木曾塚の菴主の吟に疑ひあり。左記と○古来

抄曰春色や竹首あふ先師（も才一の證）湖南よりいへり春を近江の

人と情をけふと云句は大津の尚白、海とて春をあまの人とい  
く人も引まて丹波の人とい人も同一事とていへり一句の  
とえりしと中き去来汝といふ句と作らるる尚白の言よめり

す近江の人と情をけふ六湖の勝勝なるかかしの住家あはれを  
らし春英り丹波とてわたりとてより世趣向うやあま一葉  
春又近江よあまのりとより世感なる下風流あまのり  
其場とてあまのり中きわの去来汝の風情をけふまのり  
と感賞とてあまのりけふ其場とて事を知念也と云○支  
考う世春抄之発句の句絶より小をのあま波小ををわつとて  
名かた大廻しと云云引春乃一章ハかの木曾寺の偶作あま  
世句も例の如きとて情をけふと決定し平句の難事近江  
外（是才一の證）本名義仲寺也  
外（本名義仲寺也）の意休とてあまのりは安にけ句は移るる所いれを  
外（本名義仲寺也）の意休とてあまのりは安にけ句は移るる所いれを



鎮詞の法より平此數詞より多しといふは却て俳諧の妙節にも  
云へきめや去りし舟大過し格ハ常蛇の法も似しよして並通  
の人のおそき也といふ○路通る芭蕉翁行狀記云元禄十一年  
又月十日山色をきりに父母の青もつらとや舞ふこの秋是  
氣雄小成の青もつらとや舞ふと桃鹿のせん方おくと抄あし  
又伊賀乃主人心よりつらとや舞ふ栗津の菴と立  
者志つらとや舞ふといふまよといふ説はらく梅どふ往古木曾寺よ  
翁の妙庵ありえ義仲乃墓とつらとや舞ふとありけり前ふ  
引ころんの去來抄柳の句深よと木曾塚の舊州とありし木曾も  
の翁乃庵の茶福とつらとや舞ふ也との此の吟よ木曾どのといふ

ありせの若きもこのしハ島ヶ菴也翁滅後夫草らん位也  
夫草死後南の岡へ移し一人の乃者すといへる也後寛保  
年中存の庵主咄道和尚造營し今ハ黄檗派乃一字と也  
すかりとぞ寺号ありしれり然るに又後世よりつらとや  
よといふる翁も事いし有寶曆のけりめの年雲裡坊杉  
夫翁記しよかの石山乃奥の幻住庵のかつらとや舞ふ推の樹を  
つらとや舞ふはらび移しといふ翁の庵此高地へ又ありし  
よ庵をつらとや舞ふ是のつらとや舞ふ呼木曾も今翁の石牌  
とありしとぞ是翁の末庵をいしを翁も事いして世小本翁  
寺といふ俳諧翁翁滅後のつらとや舞ふといふ翁も事いして世











是ハ後ガこゝに記ス。○十ノ月換抄トスル。まゝに安んじ  
 沈黙ス。是暗推也。又跡ヲ我小入ト入ル。入ガガガ近遠  
 也。さ何んといハ一句の仕立也。か。けり。少し。心。は。後。別。句  
 作。り。多。金。事。也。○按。ど。う。に。笈。日。記。云。元。祿。七。年。春。の  
 五。月。尾。張。の。園。小。入。巴。夫。亭。画。讚。四。幅。三。聖。人。圖。盤。背。面。の  
 像。菊。花。の。蝶。題。二。句。雲。雀。野。中。の。日。陰。  
と。り。り。し。は。句。と。ユ。ウ。リ。と。ウ。花。ハ  
 とき。見。入。は。は。り。ま。う。か。ま。花。ハ。如。し  
 謹。り。え。と。暑。の。日。乃。句。案。也。○句。意。ハ。推。也。さ。ふ。り。と。う。推。し。  
 為。深。分。ら。春。の。日。乃。句。案。つ。の。處。り。り。ら。の。こ。に。し。て。あ。ふ。一。つ  
 目。と。ま。ま。案。り。の。さ。な。ま。さ。よ。推。也。お。く。お。び。ふ。お。け。の。こ。ま。ら  
 う。よ。所。中。此。日。陰。と。見。也。の。句。し。凡。丈。の。眼。よ。又。あ。る。所。小。何。う

後。照。り。澄。々。と。後。春。の。ま。登。乃。風。情。言。外。の。情。情。ハ。ま。ま。さ。は  
 解。○澹。寂。云。世。句。り。夏。也。笈。日。記。も。五。月。と。何。も。ハ  
 夏。乃。案。也。句。中。何。と。ふ。く。炎。暑。の。唐。路。よ。深。の。ま。ま。さ。は。ら  
 日。陰。り。り。り。関。え。て。暑。苦。余。情。也。と。よ。え。ま。は。け。後。も。あ。ら。う  
 五。月。小。案。也。題。も。中。の。日。影。と。何。れ。ハ。お。の。づ。り。句。中。に  
 炎。暑。の。情。り。ハ。自。然。也。夏。乃。句。と。ま。ん。も。罪。も。う。る。べ。し。と。い。ふ。袋  
 に。春。小。入。れ。ハ。さ。つ。ま。め。く。た。ま。へ。し。

案。も。う。け。小。花。え。う。は。び。る。雀。う。か

袋 云此句小吟引と云我似て燕雀のらいつれめとて天地のる







袋云此句題し梅林とあり然もは梅の白く咲く時をいふ  
是れ好む林和靖と云ふはあはれも鶴もあはれもさうさ鶴  
斗のふきいきれおや鶴を望すやいと訝ふ鮎の句作也

○説 梅林の類 句選少くなく、其外諸集より又何れも、是も梅  
小好事の人乃活るるのみならず、世注へ、素樸ありて、何れあり  
○去来抄曰、古藏集に、此句をわけて先師のよきとあり  
し也、是も梅の句をよきまゝに、蘇し世句追従ふは、  
秋風ハ洛陽の富家より、市中を去り山家へ閑居し、  
詩弁をたのしむ、騷人旅をすゝとす、渠にむらさきに  
よて風、洛陽の人と思ひ給ふ、なけ作あり先師の句は、  
詠ふ一評者の心よ、倭偽りなり、そのちよはく招けよ、  
珠よ欺く命、知るのちよ、又句時、此れ、  
風し子亥一巡の、  
隠居孤山、常蓄兩鶴、  
連常泛小艇、  
籠縦鶴良久、  
秋風で、  
とりて、  
かの林逋の、  
きれ、

詠ふ一評者の心よ、倭偽りなり、そのちよはく招けよ、  
珠よ欺く命、知るのちよ、又句時、此れ、  
風し子亥一巡の、  
隠居孤山、常蓄兩鶴、  
連常泛小艇、  
籠縦鶴良久、  
秋風で、  
とりて、  
かの林逋の、  
きれ、



比ち〜いゝる方の事ゆ〜うの心〜と亦炭く雪よど  
そ〜すいど不肖の上よ。ゆせつく〜風雅よ〜  
りて。風雅よ〜。諛の流も〜。移ら〜  
〜我と〜の〜。拙夫の〜。よ〜の風雅  
不持よ人〜

やま〜きん〜ゆ〜莖草

**袋** 云此句大津一歩。道山路終て〜。字眼也。いと定ぬ  
〜。莖の〜。旅のゆ〜  
**林解** 此句と出〜

**説** 此註以て非也。大津一歩。乃山路終て〜。河をゆ〜  
〜。文義。〜。諸集よ〜  
○去来抄曰。湖春云。す〜。湖春の地下。此類通者也。い〜。  
巧あり〜。去来曰。山路よ〜。定〜  
〜。万葉集。オハ  
山逸赤人。ほ〜。我〜  
一智好ふ〜。堀河院御時。左郎百首。匡房も〜。



のつすすれつ〜か之入紙の條々すみれ〜のこのつら  
 大工のりり書入よ〜つがすみれ〜すぢ〜○或先人  
 のとげ句、箱根少の吟と、然もども笈日記よ、悼芭蕉翁、尾張熱  
 田連の文章あり、そのうらに云、此遠兼宮小かりし、この海、草  
 薙をとりし、是時句、心をそわ、白鳥山、標をとりし、何や  
 か、董州と〜、と〜、かく、何も、箱根の吟あり、句、熱田を  
 遠兼山と〜、多き略く、○紫をゆりのことと〜、ゆ〜、いむ  
 とげさ〜成〜、句意、袋に〜、ふあり  
 人ともぬ春や、鏡乃〜らの梅

よまじ句讀也、かよふよわは、句の意、なつかりと、わりかゆ多  
 素堂も〜、た〜、金〜、也、能〜考（味よる）○説  
 三考とる、俳句に、句讀の名目、古よりなきも、全く支考、  
 作りし、道で私ふの、一助もよせ、よ、去、好、世の好、夏  
 の人、是考にす、つ、あ、何、何、法格と、作、好、も、亦、支  
 考、的、とする、〜、つ、千梅の論、〜、弘、し、も  
 支考あり、書、〜、亦、支考、〜、世、句、の、や、〜、色、ぢ、か  
 古法に、〜、中、の、や、也、〜、知、〜、支、や、の、あり、げ、よ、句、讀、の、名  
 目、附、合、せ、し、後、の、よ、ひ、句、讀、の、名、も、〜、と、名、て、己  
 罪、〜、〜、成、〜、○世、句、意、ハ、〜、の、人、よ、〜、の、〜、鏡











故翁の歳旦小

人もそぬほるやかみのうらみ梅

こつふ句のうらみうらみ人を初遊のこつありける家の句讀の如  
うらみ感情の咏嘆の吟をよとと素堂隱居の詠をよ  
しう思へし句讀の真合めして爰に跋識せしんや  
さしげううらみうらみ家のうらみやうらみうらみ人を切了ん初  
遊の上からうらみうらみうらみうらみのやうらみうらみうらみ  
に讀ひ盡し一首をうらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみ  
さやにうらみうらみ咏歎もこつありと古人も海一垂り也  
此句もよらうらみ人もそぬほるやと切ん讀のうらみ梅と二口

のそをそるそらひやりしはあはれり又梅苑鏡とん古物よのそ  
よ梅苑の形もしも有るよめく後明がりて古鏡うらみ梅也  
うらみかや物もつとなく雲雀

解

但下巻  
附録出

此日記のそむらり唱のそにわつる梅百合のうらみ  
ともやうらみうらみうらみこりりえ再業乃粉骨をよう梅一

説

笈日記

下巻

云

系中や物うらみうらみうらみ  
夕まを物もつう梅瓜のそ

此二句の西のそら心性うらみうらみうらみ  
やうらみうらみうらみうらみうらみうらみ  
うらみ古物を引。梅もよらみ人でもうらみ恒例也。純り純りうらみ



























